

喜びラエティティアとは人間がより小さな完全から
より大きな完全へと移行することである。

——スピノザ『エチカ』

目次

1	ジェシカ	5
2	不在現場	9
3	カッターを突きつけられた母子	17
4	ル・カスポ	26
5	隅っこのパパ	34
6	「二縷の望み」	39
7	言葉なき子供時代	42
8	誘拐致死	48
9	判事の前の二人の少女	56
10	特別な一日	63
11	「傾斜屋根のある」家	70
12	近親者と歩み寄る者たち	76
13	デッサン	80
14	三面記事事件の誕生	86
15	里親家庭	96
16	泥濘の中で	103
17	パトロン氏	108
18	「性犯罪の多重累犯者」	117
19	「私はあなたの奥さんじゃない」	126
20	パトロンⅡサルコジ枢軸	132
21	マシユクール高校	140
22	人間としての犯罪者	147
23	大西洋沿岸地域	154
24	トルー・ブルー池	158
25	レティシアの肖像	169
26	「制裁」と「過失」	174
27	フェイスブック上のレティシア	183
28	犯罪ポピュリズム	195

29	美しい夏	202
30	フロンド	209
31	「たいようがたのしかた」	219
32	生きている顔	225
33	陰鬱なレティシア	230
34	「釣りはうまくいったかい？」	235
35	年越しパーティー	246
36	鑑定員の時代	249
37	遺書	255
38	のこぎりを持った男	263
39	最後の日々	268
40	その後の生活	273
41	一月十八日午前	276
42	ブリオール池	279
43	一月十八日午後	284
44	葬儀	292
45	一月十八日晚	296
46	取り引きの終わり	301
47	「あの子はおれに「やめて」と言った」	308
48	「書類」と「売女」	313
49	原初的な欠落	322
50	女性殺し	330
51	夜中の沈黙	336
52	不正の領分	339
53	翌日	347
54	三面記事事件、民主的事件	352
55	正義	362
56	レティシアは私だ	368
57	レティシアの時代	371
	訳注	379
	訳者あとがき	385
	主要参考文献	卷末 ₂
	地 図	卷末 ₁

凡例

- 一、本書は Ivan Jablonka, *Laëtitia ou la fin des hommes*, Seuil, 2016 の邦訳である。
- 一、原文の強調には傍点を付した。
- 一、「〔 〕」は原著者による補足、「〔 〕」は訳者による補足を示す。
- 一、〈 〉は原文において大文字で始まる単語を指す。
- 一、(1)、(2)……という番号は訳者による補足である。

レティシア・ペレは二〇一一年一月十八日から十九日にかけての夜に誘拐された。彼女はロワール＝アトランティック県のポルニックに住む十八歳のウエイトレスだった。双子の姉とともに里親家庭に預けられ、ごく平凡な生活を送っていた。殺害犯は二日後に逮捕されたが、レティシアの遺体が発見されるまでにはなお数週間を要した。

事件はフランス全土に激しい動揺を与えた。共和国大統領ニコラ・サルコジは、この殺害犯に対する司法の追跡調査のあり方を批判し、判事たちの責任を問い、彼らの「過失」に対する「制裁」を約束した。大統領の発言は、司法史上かつてない大規模なストライキを引き起こした。二〇一一年八月には——事件中の事件として——里親の男性がレティシアの姉に対する性的暴行の容疑で取り調べを受けた。今日なお、レティシア自身が、里親あるいは殺害犯によって強姦されたか否かは定かでない。

この三面記事事件はあらゆる点で例外的である——与えた衝撃、メディアと政治における反響、遺体発見のために用いられた大規模な手段、十二週間にわたって続けられた捜査、共和国大統領の介入、司法官によるストライキ。もはや単なる事件ではなく、国家的事件だった。

しかし、レティシアについてわれわれは何を知っているだろうか——人目を引く三面記事事件の被害者だったことを除いて。何百もの記事やルポルタージュが彼女について語ったが、それはただ失踪の夜と裁判について語るためだった。ウイキペディアに彼女の名前が登場するのは、殺害犯のページの「レティシア・ペレ殺害事件」という項目においてである。彼女は自分の殺害犯を心ならずも有名にし、自分はその

名声の陰に隠れ、犯罪行為の到達点に、悪の序列における成功例になった。

これが、殺害犯が「自分の」犠牲者に振るう権力である。彼はレティシアから生命を奪っただけでなく、その人生の方向を変え、不吉な出会い、取り返しのない悪循環、致命的な行動、遺体への侮辱へと導いていった。死は彼女から人生そのものを奪い取ったのだ。

被害者を犠牲にして殺害犯を持ち上げないような犯罪の物語を、私は見たことがない。そこでは殺害犯が物語り、悔恨あるいは自慢を述べたてる。裁判において、彼は主人公と言わないまでも、焦点である。私は反対に、女性たちや男性たちを彼ら自身の死から解放し、生命さらには人間性を奪った犯罪から引き離したい。「被害者」として称えるのではなく——それもまた終点へと差し戻すことになるから——、ただその人生の中に置き直したい。彼らのために証言したいのだ。

私の本のヒロインはただ一人、レティシアである。われわれが彼女に関心を寄せることで、彼女は不遇の状態を逃れ、自分自身に立ち返り、尊厳と自由を取り戻すことができるだろう。

*

レティシア・ペレの生前には、ジャーナリスト、研究者、政治家の誰一人として彼女に関心を抱く者はいなかった。なぜ今日になって彼女のために一冊の本を書くのだろうか。この通りすがりの女性は、奇妙な運命によって一瞬だけ有名人になった。世間の目には、レティシアは死んだ瞬間に誕生したのだ。

私は、三面記事事件を歴史の対象として分析できることを示したい。三面記事事件 (Fair d'ivers) は決して単なる「事件」(fait)でも「雑多」(divers)でもない。それどころか、レティシア事件の陰にあるのは人間性の深淵とある種の社会状況である——すなわち、家族の解体、子供たちの無言の苦しみ、早くから社

会に出る若者たち、そしてさらに、二十一世紀初頭のフランスの貧困層、都市周辺地域〔郊外よりさらに外側の地方大都市圏を指す〕、社会的不平等等。われわれが明らかにしたいのは、捜査のメカニズム、司法制度の変貌、メディアの役割、行政政府のはたらき、その告発の論理やその共感のレトリックである。揺れ動く社会の中で、三面記事事件はその震央に位置している。

しかし、レティシアはその死によって重要なだけではない。その人生もまた、一つの社会的事実であるがゆえに、われわれにとつて重要である。それは自分より大きな二つの現象を体現している——すなわち、子供たちの傷つきやすさと、女性たちが受けている暴力を。レティシアが三歳のとき、父親は母親が強姦した。次に、里親が姉を暴行した。そして彼女自身も十八年しか生きられなかった。これらの悲劇が示すように、われわれの生きるこの世界で、女性たちは罵倒され、責めたてられ、打たれ、強姦され、殺されている。この世界で、女性たちは完全には権利を持たない。この世界で、被害者たちは脅しや暴力に対して諦めの沈黙で答える。この非公開審理の出口で死んでゆくのは、いつも同じ者たちである。

レティシア、誰からも愛されたこの輝くばかりの若い娘は、屠殺場の家畜のように殺されるために生まれたわけではない。とはいえ、彼女は子供の頃から、あてもなくたらい回しにされ、打ち捨てられ、怯えて生きることに慣れていった。そしてこの傷だらけの長い道のりは、彼女の悲劇的な最期と、われわれの社会全体を解き明かす鍵である。この平和な時代に誰かを破壊させるには、殺すだけでは十分でない。まず、暴力と混沌のさなかに生み落とし、安らかな愛情を奪い、家族の絆を破壊し、その次に邪悪な養育支援員のもとに置き、そのことに気づこうとせず、そして最後に、すべてが終わった後で、その死を政治的に利用する必要がある。

断るまでもなく、私はレティシアの知り合いではない。私は、彼女を愛した人々——両親、友人、同僚

——や、彼女の最後の瞬間を再現しようとした人々——司法官、憲兵、鑑定員、弁護士、ジャーナリスト——を通じて彼女に出会った。私の調査は彼らの調査から生まれた。いわば、ある者の愛情や別の者の仕事に基づいた、メタ調査である。レティシアの人生を理解するためには、彼女が他の子供たちと何も変わらなかった頃へ時代をさかのぼると同時に、彼女を奪い去った誘拐と殺害をたどり直す必要がある。それは、犯罪捜査と絡み合った人生の物語、死後も続けられる生の伝記ビオグラフィになるだろう。

虐待された赤ん坊、忘れられた女の子、里親に預けられた小娘、臆病な少女、自立を目指す若い娘——レティシア・ペレが生を享けたのは、殺害犯の人生における一事件になるためでも、サルコジ政権下の話題の一つになるためでもない。私はレティシアのことを夢想する——彼女がここにいないのは、人々の視線の届かないお気に入りの場所に隠れているからだ。私は死者たちの復活を妄想しているのではない。ただ、沈みゆくものが水面に残すかすかな波紋を記録しようとしているのだ。

1 ジェシカ

二〇一四年四月、里親の裁判のすぐあとで、私はレティシアの双子の姉ジェシカ・ペレの弁護士を務めるセシル・ド・オリヴェイラに手紙を書いた。

拝啓

私は歴史家で作家で、パリ第十三大学の教授です。お手紙を差し上げたのは、レティシア・ペレについて本を書きたいと思うからです。

彼女の物語が私の心をとらえたのには、いくつかの理由があります。まず、私は三人の娘の父親です。次に、私の研究は、両親から引き離されたり、里親家庭に預けられたり、しばしば虐待を受ける捨て子についてのものです。最後に、私は、第二次世界大戦中に二十八歳と三十五歳で殺された自分の祖父母の伝記(伝記)を書きました。この本の中で私は、彼らの死にとらわれることなく、その人生を——平凡さや挫折、計画や希望とともに——たどろうとしました。それは歴史研究であると同時に、人生の盛りに殺害された二人の若者に捧げる墓碑でもあります。

私がレティシアのことを書きたいのは、それと同じ感情によるものです。彼女の生涯をたどり直したい——彼女が歩んだ道のり、耐え忍んだ試練、目指していた未来、生活が破壊されることの不当さと恐ろしさを。私の祖父母にしたのと同様に、オマージュを捧げ、そしてとりわけ正義と真実を追究

したいのです。

この計画に対するあなたのお気持ちとご意見をお聞かせください（控訴審が準備中であることはよく存じています）。まずあなたにお会いして、その後でジェシカに私のやり方について説明したいと思えます。彼女の同意なしにこの企画を進めるつもりはありません。最後に、法廷でのあなたの戦いぶりに対する私の称賛をお伝え申し上げます。

最初の面会のあと、セシル・ド・オリヴェイラは、ジェシカが不安定になっっているにもかかわらず、私を彼女に紹介することを承諾してくれた。ジェシカは八歳で両親から引き離されて施設に預けられ、里親に性的にもてあそばされた。そしてさらに妹を殺された。

二〇一四年六月、私たちはナントにある彼女の弁護士事務所に行った。開いた窓の外では、ロワール川が木々の緑の向こうできらめいていた。ジェシカに会うのだと考えると私は気後れを覚えた。私の計画が彼女の判断にかかっているからだけでなく、この若い娘が双子の妹を亡くし、二十二歳の若さですでに二つの重罪裁判³——レティシア殺害犯と彼女の里親の——を経験しているからだだった。この六十四歳の里親の裁判では、家族全員が彼の後ろで一丸となり、加害者が被害者に変身し、ジェシカの方が犯人に、純朴すぎる一家の父親を毘にはめた狡猾な策略家にされたのだ。被告人は禁固八年の判決を受け、控訴を断念した。今日、ジェシカは一人暮らしで、ナントの公務員食堂で働いている。

彼女は十六時に到着した。髪の毛の短いほっそりした女性で、黒っぽいレギンスをはき、黒のブルゾンで脱ぎょうもしなかった。セシル・ド・オリヴェイラは彼女にさまざまな情報を伝えた——レティシア殺害犯の控訴審の日程や、妹の死と里親家庭で受けた暴行に対して受けるべき賠償金について。ジェシカは内気

で不安な様子で、何とかして私の視線を避けようとしていた。弁護士が手続きについて話しているあいだ、彼女は押し黙り、ときおり「はい」と言う代わりにうなずいた。その強い視線と、へまをするのを恐れる少女のような緊張とが対照的だった。

ジェシカは質問のリストを取り出した。自分はすべての裁判に出席しなければならぬのか。いや、「事実」説明を除く、一日か二日だけでよい。それで全部おしまいか。そうだろう、おそらく破毀院⁽¹⁾までは行かないだろうから。賠償金はいつもらえるのか、と知り合いがしきりと尋ねてくるのは普通のことなのか。セシル・ド・オリヴェイラはうんざりした顔をした。「いいえ、普通じゃないわ。気をつけなさい！」最後に、ジェシカはリュックから、出版されたばかりの妹に関する本を取り出した。内容は嘘ばかりで、彼女はショックを受けていた。

セシル・ド・オリヴェイラが私をジェシカに紹介すると、彼女は黙って私をじっと見つめた。友情と敬意が電波のように彼女の心に直接伝わればよいのに、と私は思った。しかし私はジェシカに、たどたどしい言葉——頭の中で何度も繰り返したためにいっそうそらざらしく響く教員の言葉——で、歴史と記憶に関する私の計画がどのようなものかを語った。私にあなたがたの子供時代の思い出を話してください——あなたがたが暮らした場所や、楽しかったこと、友達や遊び、口喧嘩をしたり浜辺を歩いたことを。

ジェシカは承諾した。喜んで妹の話をしたい、ただし事件のことを除いて。彼女はもう白の行進〔市民によるデモ行進〕には参加していなかった——意味がないから。毎月、十八日と十九日が来るのをひどく恐れていた。

私たちは携帯電話の番号を交換した。ジェシカは弁護士に礼を言い、ややぎこちない陽気さで別れの挨拶をした。

彼女が行ってしまふと、部屋はがらんとした。私は、ジェシカが私に委ねると承諾してくれた責任の重さに押しつぶされそうになり、死んだ子供たちの国を旅することの不安に襲われた。その扉が私の前に開かれた——木々の緑が輝くこの窓が。彼方にはロワール川が流れ、一七九三年に溺死刑⁵になった男たちや女たちの思い出をきらめく水が運んでゆく。私の調査が始まったのだ。